〔書言字考節用集七器財〕鐵束（カナワ）、鐵輪（同）、

〔大上臈御名之事〕女房ことば

一かなわ　三あし

〔貞丈雜記八調度〕一かなわと云は、物を煮る時、鍋をかくる物也、鐵にて輪をして、角を三ツ立たる物、常に用る物也、江戸にてはごとくと云也、今も京大坂の人などは、かなわといふ也、舊記にかなわすゆると云事ある故記し置也、古は足を下にして輪を上にして居たり、

〔散木弃謌集九雜〕まへのすびつにすることもなくて、かなはといふものゝたてるをみてよめる、

いかにせんいづちゆけども世中のかなはぬさまにになる物もなき

〔太平記劍卷〕嵯峨天皇ノ御宇ニ、或公卿ノ娘、餘ニ嫉妬深シテ、貴船ノ社ニ詣ツヽ、七日籠テ申樣、中○略我ヲ生ナガラ、鬼神ニ成テタビ給ヘ、妬シト思ツル女、取殺サントゾ祈リケル、○中略女房悅テ都ニ歸リ、人ナキ處ニタテ籠テ、長ナル髮ヲバ五ツニ分ケ、五ツノ角ニゾ造リケル、顏ニハ朱ヲ指シ、身ニハ丹ヲ塗リ、鐵輪ヲ戴テ、三ノ足ニハ松ヲ燃シ、續松ヲ誘（コシラ）ヘテ、兩方ニ火ヲ付テ口ニクワヘツヽ、夜更人定テ後、大和大路ヘ走リ出、○下略

〔增補下學集器財下〕〔二〕五德（ゴトク）

〔書言字考節用集七器財〕五德（ゴトク）鐵束之屬（カナワ）

〔瓦礫雜考一〕五德三德　八德

鐵器に五德といふも利用なること五ツあるなるべし、こは足三ツありて、上下左右共に用べければ、五德と名づくる歟、さて五德はいつのころより始りけん、近くは林氏が節用集などにも洩たり、古へはあしがなへ、あしなべなどありて、今の五とくはなしと見えたり、後世あしがなへ、あしなべなどは、次第に不便利なる事に成て、脚をば別に分ちて作り出しものなるべし、○中略五とくといふ名はいと後の名なり、